
二十歳の想い

ありま氷炎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

二十歳の想い

【Nコード】

N5550Y

【作者名】

ありま氷炎

【あらすじ】

美形神主の花村ヒトシは7歳年上のアナンへの恋心を隠していた。それは幼馴染の北守ヨウスケに遠慮していたのだが……

1 (前書き)

『花の島の秘密』の完結後の世界、1年後の話です。
初めての人にもわかるように説明をつけて書いたつもりですが…

「アナン？」

茶色のふわふわした柔らかい髪を後ろにまとめ、美しい少年、今や美少年というより美青年という呼び方が相応しい花村ヒトシは不機嫌そうな友人、町田アナンに呼び掛ける。

町田アナン、7歳年上の女性でヒトシの元教師である。

2年ほど前にいろいろな事件があり、それなりのあやうい関係にもなったが、今やいい友人として付き合っている。

「なんでもない」

先生と生徒であったころは2人の関係はぎこちないものであったが、今ではアナンの方が打ち解けたようで、ヒトシよりかなり年上にも関わらず、同じ歳のような態度を取るようになっていた。

「アナン、そういえば3日後、俺の20歳の誕生日なんだ。祝ってくれるよね？」

「もちろんよ。本当、花村くん、変わったよね。2年間はツンツンしてて怖かったけど」

「怖かった？遺伝子に支配されていたからね。あの時は本当にアナンを抱きたくてしょうがなかったし」

ヒトシが目を細くして意地悪そうに笑うとアナンは少し赤くなる。

(こういうところは本当、同級生の奴より子供なんだよな)

アナンの変わらぬ可愛らしさを見て、ヒトシはほくそ笑む。

2年前まで、ヒトシはいわゆる宇宙人だった。アナンもしかりで、ある事件があり、父を亡くし、そして地球人になった。

宇宙人である時は生き残りたいという遺伝子のためか、アナンを抱きたい衝動に苦しめられていた。どういうわけかヒトシの体はアナンを交わることで延命できるようになっていた。しかしおかげさ

まで色々あり、遺伝子を抜き去り、一般地球人となった今、ヒトシはアナンに対して飢餓感にも似た、抱きたい衝動に駆られることもなくなっていた。

しかし、アナンに対しても変わらぬ恋愛感情を持っており、ここ2年ヒトシはそれをひた隠しつつ、友人として付き合っていた。

それは幼馴染の北守ヨウスケのせいでもあり、アナンがひそかにヨウスケのことを好きなのをわかっていたからだだった。

「町田センサーは北守センサーのこと好きなんだろう?」

「やめてよ。花村くんにセンサーと呼ばれるとなんか変な気持ちになるから」

「だって、2年前まで俺の先生だったのは確かなんだから」

「でも嫌なのよ」

アナンは眉間に皺を寄せるとふいつと顔を背ける。

(気付いているの?俺の気持ち?)

ヒトシはこうやって2年前のことを持ちだしてアナンをからかうことが多かった。その度にふとアナンが自分の気持ちに気づいているような気がしていた。

「アナン。意地を張っているとヨウスケを誰かに取られるよ。いい歳なんだから」

「いい歳って!悪かったわよね。27歳で彼氏もいなくて」

アナンはぷりぷり怒るとヒトシに手をふり神社を出ていく。

「アナン」

ヒトシはため息をつく、中断していた神主の仕事を続けることにした。

若い美形神主は現在19歳、高校を卒業したと同時に亡き父がしていた神主の仕事を引き継いだ。

以前は俗に超能力と呼ばれる力があり、いろいろやることがあったが、力を失った今は、神社の掃除、観光客への応対、お賽銭箱の管理などヒトシにすれば退屈な仕事ばかりだった。

「ヒトシ」

そう声がして、背の高い黒髪の青年が現れる。眼鏡をかけた知的な美青年は北守ヨウスケだった。アナン同様教師をしていたが、父シユンイチが不祥事を起こし、実刑を受けたせいで教師を退職、島の観光を企画する一般企業に入っていた。

「ヨウスケ。アナン怒っていたけど。また喧嘩した？」

ヒトシがそう言うと言とヨウスケは口を歪める。

ヨウスケは何かとアナンを怒らせるようなことを発言することが多く、2人はよく口論していた。

「別に。ただお前の20歳のお祝いは2人ですればいいじゃないかって言ったただけだ」

（あちゃ。このニブチン）

ヒトシはヨウスケの答えに眉を潜めた。

（このニブチンにはアナンの気持ちは届かないんだろうな）

「ヨウスケ。お前さあ、アナンがお前のこと好きだってこと知ってるのか？」

「……」

「いい加減、お前も認めたら？お前もアナンのこと好きなんだろう？」

「…そんなわけないだろう？あんな可愛くない女。俺の好みじゃない」

（嘘ばかり）

ヒトシはヨウスケが嘘をついていることを知っていた。

一般的に女性には優しいヨウスケがアナンだけにはやけに冷たい態度を取る。

それはアナンがヨウスケにとっては特別な存在だということを証明していた。

「ヨウスケ。俺に構わなくてもいいぜ。俺は別にアナンのこと何とも思っていないし」

（嘘だな）

ヒトシはこの2年で身につけた大人の顔をして、ヨウスケに笑いかける。

「……そうか。まあ、でも20歳の祝いは2人でやれ。俺は用事がある」

「用事?!俺の成人の祝いより大事なのか?!」

「マサシのことだ。その日はヒトミとマサシを連れて病院に行くから」

「でも夜は暇だろう?」

ヒトシが言い募ったが、ヨウスケは曖昧に笑うと手を振って神社から出ていく。

（2人で祝うか）

ヒトシは心の中でそうつぶやくと空を見上げた。

複雑な話だが、マサシとはヒトシの亡くなった父親の名前だ。しかし、ヒトシの大叔父ノゾムの子供の名前でもある。ヒトシの義理の大叔母にあたる女性ヒトミはヨウスケと昔付き合っていたこともある女性だ。そんなこともあり、ヨウスケはヒトミとその子供マサシのために、いろいろ時間を割くことが多かった。

それがいたたまれないのはアナンで、ヒトミとヨウスケが出かけるのをヤキモキしているようだった。

（素直になればいいのに）

ヒトシはそう思っていたが、実際にアナンが素直になり、ヨウスケと付き合い始めることを考えると暗い気持ちになるのも事実だっ

た。

(でもそろそろ限界だよな)

2年間、我慢してきた恋心も最近は自分の中を飛び出そうとして
いるのがわかった。

(ここは告白でもしてすかっとするか)

ヒトシはそう考えてみたが、それをするとアナンの側にいること
もできなくなると思い、実行に移せないでいた。

数日後、

ヒトシの誕生日が来た。

結局2人は町の居酒屋でお祝いすることになった。

「乾杯」。これで晴れてお酒が飲めるわね。大人の仲間入りおめで
とー!」

アナンはそう言っただ笑った。

(やっぱり可愛い)

ヒトシも同様に笑うとアナンのコップに自分のコップを重ねた。

数時間…

「北守の馬鹿」

すっかりぐてんぐてんになったアナンを背負ってヒトシはそのア
パートに来ていた。

階下でタクシーを待たせ、階段を上る。

「アナン、着いたよ。鍵は?」

ヒトシはアナンをドアの前で降ろし、そう尋ねる。

「これ…」

アナンは鞆をぐそぐそと探ると鍵を出す。

「じゃ、あとは自分で。俺は帰るから」

(俺の誕生日なのにな)

苦笑しながら、アナンをベッドに連れて行くとヒトシは背を向ける。

「！」

ふと手を掴まれ、ヒトシはギョツとする。アナンは潤んだ目をむけて見ている。

「行かないで。お願い」

その声にヒトシの体がすくみ。

2年前、何度も触れたその体、まだその感触は覚えていた。しかし、ヒトシは息を吐くと目を閉じる。

「アナン。酔った勢いでそんなこと言うのは最低だ。俺の気持ち、知ってるくせに」

傷つけるとわかってはいたが、ヒトシはアナンを見据えるとそう言葉にした。

「…ごめん」

アナンは俯くとヒトシの手を離す。

「じゃ、俺は帰るから。アナンも素直になったほうがいいよ。じゃないと俺が辛い」

ヒトシは背をむけたまま、そう言うと玄関を抜け、階段を勢いよく降りる。

しかし、階下にいたはずのタクシーはすでにどこかに行った後だった。

「まじ？しょうがない。歩いて帰るか」

傷ついたアナンの瞳が忘れられなかった。火照った自分の体を冷やしたかった。

あの時、アナンをあのまま抱いてしまおうかと思った。

しかし、2年前の自分とは違うと言い聞かせ、アナンを傷つける言葉を吐いた。

(あー苦い20歳)

ヒトシは苦笑しながら空を見上げる。空にはぼっかり月が浮いて

いた。

「ヒトシ？」

ふと声をかけられ、ヒトシは足を止める。車を寄せてきたのはヨウスケだった。

「帰る途中か？」

「まあね」

「乗れよ」

ヒトシはうなずくと助手席のドアを開けた。

「誕生日どうだった？」

「どうもこうも。アナンが泥酔。最悪」

「本当、酒癖悪いよな。あいつ」

ヨウスケは前を向いたまま苦笑する。

「マサシはどうだった？」

「ああ、元気だったよ。ヒトミがノゾムさんにも面会したいっていうから、刑務所に行ったはいいけど、急に行って会えるわけじゃないよな。結局、会えないまま帰ってきた」

「そうか…」

「悪かったな。20歳の誕生日に」

「別に」

そうして2人の話は途切れる。

「あのさ、ヨウスケ。アナンはお前のことが好きだ。答えるつもりはないのか？俺は構わないけど」

「……町田か。俺の好みじゃないんだ。本当に」

そう答えるヨウスケの眉が一瞬だけ険しく結ばれたのはヒトシは見逃さなかった。

(ヨウスケは遠慮している。俺に。幼馴染の俺に遠慮してるんだ)

結局、2人がそれから会話することなく、家に辿り着く。隣り合わせの家なので、ヨウスケの家の車庫からヒトシは自宅に戻る。

「ヒトシ。お前こそ、告白したらどうだ。あいつはきっとお前のと」

「ヨウスケ。お前って本当、ニブチン」

（馬鹿たれ。ヨウスケ）

俺は玄関に向かって走るとそのまま逃げるように中に駆け込む。

誰もいない家はしんと静まり返り、ヒトシは2階に勢いよく駆けあがり、ベッドにもぐりこんだ。

（まったく、なんて最悪な20歳のはじまりなんだ）

目を閉じて寝ようとしたが、ヒトシの目は覚めまくり、眠りに入ったのは鳥たちがさえずりだす早朝だった。

翌朝、神社に寝不足の体を引きずっていき、必死に業務をこなす。

営業スマイルと浮かべて、参拝客の対応…

父と同じでヒトシは女性観光客に人気だった。

「花村さん、神主って言うっても遊んでもいいんですよね？今夜、私と……」

「ごめん。職業柄そういうことは禁止されてるんだ」

（俺も相当面の皮が厚くなったもんだ）

心の中で舌をぺろりと出して、ヒトシは穏やかな笑顔を浮かべる。いつもなら女性客はそれで諦めるものだった。

しかし、今日の女性は違った。

「花村さん、友達から聞きました。高校生のころは結構遊んでたみたいじゃないですか。誰にも言いませんから、私と遊んでください」（あちゃー）

女性の言うとおり、高校生のころヒトシは派手に女性とそういう関係を楽しんでいた。神主になった今、同じ行動をすることもできず、また興味が薄れたので控えていたが、このことを持ちだされるとは予想外だった。

「ねえ。お願いします」

女性に腕を掴まれ、ヒトシは女性をまじまじと見た。

背格好はアナンと同じ、顔も似てるところがあった。

（たまにはいいか。別に清純神主ってわけでもないし）

「いいよ。でも秘密だから」

にこっとヒトシが笑うと女性はきゃーと嬉しそうに悲鳴を上げた。

(これはないぜ)

女性に連れて行かれた場所はカラオケで、なぜかそこには数人の女性がいた。話題の美形神主とデートすると友達にメールを送ったところ、我も我もと来たらしい。

(ま、健全でいいか)

女性と二人きりであれば手を出していたかもしれないとヒトシは思い、久々の賑やかなカラオケを楽しむ。

数時間ほど歌い続け、へとへとになってカラオケから出る。女性たちは島に来た観光客らしく明日帰るので、いそいそと帰り始めた。

しかし、そのうちの一人、最初にヒトシに声をかけたアナンに似た女性、彼女だけがぴたつとヒトシに寄りそって離れなかった。

(この人も、遊びみたいだし。いいかな)

昨日のアナンの様子が忘れられなく、ヒトシは女性の腰に手を回す。

「?!」

ホテルに入ろうとすると、見知った顔を見つける。それがヨウスケだとわかり、ヒトシは走った。

「ヨウスケ！なんでお前！」

隣にいた女性はアナンではなかった。知らない顔だった。

「お前こそ」

ヨウスケは現れたヒトシにぎよつとしたが、ヒトシもまた別の女性を連れているとわかり、睨みつける。

「お前、アナンはどうする気だ？」

「お前、町田はどうする気だ？」

そう聞いた声は同時だった。

ふと2人は笑いだす。

「すまない。やる気がしない。家まで送る」

「ごめん。俺も。宿まで送るよ」

笑いながらそう言う2人の男の様子に女性たちは顔を見合わせる。

1時間後

2人はそれぞれ女性を送った後、家の近くの浜に来ていた。

申し合わせていたわけではないのだが、なんとかお互いがここに
来ている気がしていた。

「お前、俺の姿見なかったら、やる気だったのか？」

「お前こそ」

そうお互いに言い、ため息を漏らす。

「アナンが知ったら泣くな」

「そうだな」

アナンが誰のことを思って泣くか、わからなかった。

ヨウスケはアナンがヒトシを好きだと考え、ヒトシはその逆を思
っていた。

2人は空を見上げる。

星が瞬き、流れ星が見えた。

2人は目を閉じ、願いを想う。

しかし、お互いの願いを知ることにはなかった。

「知ってるわよ」

狭い島の中、昨日のことは既にアナンの耳に入っていた。

「でもさあ、遊ぶのはよくないと思うの」

教師らしく、アナンはそう語る。

会合場所は居酒屋だった。

アナンのピッチは早く、すでに2人よりも酒の量は上回り、顔が真っ赤になり、目が座っていた。

「ねえ、2人とも好きな人いるの？誰？」

アナンのことを考え、そのアパートの近くの居酒屋で飲んでいたり泥酔した彼女をヨウスケが背負い、3人はアパートに向かって歩いていった。

「アナンは誰だと思う？」

「うーん。私？」

(酔うと宇宙^{アムル}人気がでるよな。こいつ)

いつもなら絶対言わないであろう台詞を吐くアナンにヒトシは苦笑する。

「アナンは誰が好きなの？」

(今なら本当のことを言うかもしれない)

ヒトシはどきどきしながら、ヨウスケの背中のアナンに顔を向ける。真っ赤な顔の彼女はうーんと考えた後、にっこりと笑う。

「花村マサシさん」

(?!)

予想外の答えにヒトシは顔をぽかんと開け、ヨウスケはよろめく。「だって、花村くんの顔に優しい時の北守の性格。パーフェクトでしょ。あーなんで死んじゃったの。神様の馬鹿！」

酔っ払いは飛んでもないことをいうとすーすとヨウスケの背中で寝入り始める。

2人はわざとらしく大きなため息をつく、顔を見合わせ歩き出す。

なんだかかくすぐつたいような暖かい想いが2人を包む。

ヒトシは、アナンを背負うヨウスケを見ながら、このまま3人でいつまでも一緒に歩いていけるといいなと思った。

2 (後書き)

この前の話が気になる方は『花の島の秘密』を読んでみてください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5550y/>

二十歳の想い

2011年11月17日03時27分発行